共創・共育・共感　尾鷲市教育長だより
2014. 8. 29.（金）　第89号

子育ては　広く長い目で！

新訳聖書のマタイ伝にこんな話があります。
人々が眠っている間に、敵がやってきて、小麦のあいだに雑草の種を蒔いていった。小麦の芽が出ると、いっしょに雑草の芽も出てきた。
奴隷たちが主人に言った。
「雑草を抜きましょうか」
「刈り入れまで待ちなさい」と主人は言った。
「どうしてですか」
「今、雑草を抜こうとすると、小麦も一緒に根こぎすることになるから、収穫までいっしょに成長させなさい。刈り入れのとき、雑草を抜いてから束にして焼いてしまいましょう」

キリストは、こういうたとえ話がとてもじょうずだったようです。
小麦の種を蒔くものは「人の子」、畑は「世界」、雑草は邪悪なものの子、収穫は「事物の体制の終末」、「燃やす」は「事物のひとつの終末で、地獄の業火に焼かれる」ことを表しています。

ということで、この話は、農業の話ではなく、人間世界の話であります。畑に芽が出たばかりのとき、人間でいえば、幼児期や少年時代にあたるわけですが、「これはいい麦だ。これは雑草だ」と、早いうちから選別して雑草を抜いてはいけない。そうすれば、せっかくの小麦まで痛めることになってしまうといっているのです。

では、いつ「雑草」として処分をすればいいのか。それは「刈り入れ」のときである。つまり、死ぬときだというのです。死んだときに、最後の審判がくだり、雑草は地獄の火に焼かれるというのです。

ひるがえって、今の世の中を見てみると、雑草だか、小麦だかわからないうちに「これは小麦で、これは雑草だ」と、早合点して分けてしまってはいないでしょうか。小さいうちから、よくないところをすぐに直そうとして、かえって、これから成長するよい芽を摘んでしまってはいないでしょうか。

人の値打は、そんなに早いうちからわかるものではありません。はじめは雑草のようにみえたものが、じつは小麦だったということもあります。ですから、学力やスポーツといった物差しだけでなく、人をもっと広く長い目でみて、子育てにあたることが大事だと思います。

話は変わって、今の子どもたちの生活の中で、なかなか切り離すことができず、どの家庭でも苦労しているゲームやパソコンへの対応のお話をします。

ところで、テレビゲームをやりすぎると「ゲーム脳」になり、前頭前野の機能が低下するといわれています。前頭前野とは「人間の感情や理性、作業記憶」に関する部位です。また、同じようにパソコンをやりすぎると「パソコン脳」になることもわかってきました。「パソコン脳」はほとんど「ゲーム脳」に近いらしく、日本健康行動学会の森昭雄教授は、次のような「子どものパソコン脳のチェック・リスト」を作成しています。

① 一方的で身勝手なふるまいが多い
② 人の話をよく聞かない
③ 漢字が出てこない
④ めったに笑うことがない
⑤ いつも無表情である
⑥ いつもイライラしている
⑦ 会話をしても言葉が出てこない

チェック項目が多いと注意が必要だといいます。

とくに脳が未発達な幼児期や児童期にパソコン等を使い続けると「思考力や創造力が乏しくなる」ともいわれています。
ですから、脳が成熟する１２歳くらいまでは、なるべくパソコン等にドップリと漬かってしまわない環境づくりが必要です。しかし、今やパソコン等は必需品となっていますから、使わないというわけにはいきません。

では、どうしたらいいのでしょうか。森昭雄教授の提言をまとめると、次のようになります。

１　思考する習慣をつける。
　パソコンに向かって作業した時間以上に、集めたデータを元にディスカッションする。あるいは、手書きでレポートをつくる。

２　読書させる。
　言語野などの脳を刺激するため、読書させたり、読書感想文を手書きさせたりする。

３　パソコン操作時に音楽を流す
　リズミカルな音楽を流すと前頭前野のはたらきが強まる。

４　遊びをする
　どろんこ遊びやかくれんぼなどの五官を使う遊びをすると脳の機能が高まる。パソコンに向かい過ぎると、前頭前野の働きが衰えると同時に、「ＶＤＴ症候群」という眼精疲労や肩凝りなどの症状に悩まされるようになる。